



福祉友の会プロジェクトチームのメンバーが、「インドネシア日本残留兵歴史ギャラリー」設立の意義や趣旨を説明すべく、残留日本兵の子孫を個別に訪問（写真は残留日本兵・藤山氏の親族）

特別寄稿

残留日本兵の記憶と記録を次の世代に ～福祉友の会の40年～

福祉友の会ギャラリープロジェクトチーム 上野太郎

■1000人の日本兵が独立戦争に参加

2014年8月25日、東ジャワ州マランで、インドネシア国軍の儀仗兵に抱えられた一基の棺が英雄墓地に運ばれ、丁重に埋葬された。棺にはインドネシア国旗「メラプティ（紅白旗）」がかけられ、軍楽隊によるラッパの音が響き渡った。

その人の名は小野盛（おの・さかり、インドネシア名・ラフマツ）。インドネシアにおける最後の残留日本兵とされている。残留日本兵とは、どのような存在だったのか。

「残留日本兵」をインターネットで検索してみると、ウィキペディアでは「第二次世界大戦の終結に伴う現地除隊ののちも日本へ帰国せずに現地に残留した大日本帝国軍の将兵を指す」と定義されている。

インドネシアでは、1945年8月15日の終戦後、約1000人の軍人・軍属が現地に残り、各地で独立戦争に参加した。敗戦直後の混乱期で情報も限られる中、戦犯として裁かれるという話だけでなく、「輸送船不足で全員の帰国には20年かかる」「連合軍キャンプに收容され強制労働に長期間従事させられる」「食料もない離島に移され自滅する」「引揚船は老朽船が用いられ、途中の海上で撃沈させられる」



国軍の儀仗兵が参加し、厳かに執り行われた残留日本兵・小野氏の葬儀

など、さまざまなうわさが飛び交ったという。

そのような背景も踏まえた上で、それぞれの人たちがインドネシアに残る決断をした理由について、以下のような理由が挙げられている。

- (A) 捕虜となることを嫌い、それまで日本が約束していた独立支援のため、積極的に残留。
- (B) 敗戦による日本の将来に悲観又は絶望。
- (C) 暮らしやすいインドネシアに第二の人生を期待。
- (D) 戦犯に問われることを恐れた、あるいは生命に対する不安。
- (E) インドネシア側からの残留の誘い。
- (F) 兵器をインドネシア側に渡した責任、その隊長と行動を共にした隊員、あるいは戦友とともに残留、または拉致されての残留、部隊復帰できず残留。日本に帰国のための手段として残留。
- (G) 日本の家庭の事情、現地の妻子のためなど。

敗戦後、独立をいち早く宣言し、主権の確立を目指したインドネシア独立派は、連合軍の進駐が進むにつれ、日本軍が保有していた武器の奪取が必須となった。日本軍は進駐してきた連合軍から、治安維持のための警備を命じられ、その狭間に立たされる場面も絶えなかった。武器の引き渡しをめぐる日本軍とインドネシア独立派の衝突も頻発し、多数の犠牲者が出た。ジャワ島で最大の衝突とされるスマラン事件では、民間人を含め、日本側に 200 人以上の死者、行方不明者が出たとされる。

理由はそれぞれ異なれど、残留者たちは日本軍政期に各地で結成された郷土防衛義勇軍（ペタ）の流れを汲み、インドネシア人の訓練や作戦指導を行うだけでなく、兵器の修理や銃の製造に携わり、時には自ら武器を取って戦闘に加わった。日本が後のインドネシア初代正副大統領となったスカルノとハッタにインドネシアの独立容認を伝えたのは敗戦直前の 1945 年 8 月 9 日ではあったが、アジアの解放をうたって各地に進駐したこともあり、真摯にインドネシアの独立を願っていた人も多かったという。

それぞれの思いや事情を抱えながら、独立戦争に参加した残留者のうち、531 人が戦死や行方不明となり、324 人は永住を選択、45 人は日本への帰国を果たしたとされている。ともに独立戦争を戦い亡くなっていった戦友の霊を慰めるために、残留を決意したという者もいた。

■残留日本兵の互助組織を設立

インドネシアに残った残留日本兵の道のりは決して平坦なものではなかった。残留者は日本軍人・軍属として第二次世界大戦時に進駐してきたまま日本に戻らなかったということもあり、日本においては脱走兵となり、インドネシアでは無国籍扱いとされた。独立戦争時には連合軍から懸賞金がかけられたため、日本兵であることを隠す必要があったほか、日本の親族に汚名を着せたくない、インドネシア名のみを名乗って生きていく者もいた。

1949 年に正式に独立が認められて以降、当初は外国人に対する取り締まりも厳しくなった。インドネシア人の妻や家族も含め、外国人としての税金が徴収されたりしたほか、日本に送還されるとのうわさもあったという。

独立直後の 1950 年代、多くの残留日本兵は若い体を唯一の資本に、用心棒や物売り、漁師などの単純労働に従事した。先に職を得た残留日本兵を頼り、職を求めて転々とした。

1960 年代には、残留日本兵のインドネシア国籍取得が進む。50 年代末頃からは日本の企業進出が本格化し、一部の者は商社や建設会社などの日系企業に勤めて両国の橋渡し役を務め、安定した生活を築き始めた。日本企業と合併企業を設立し、成功する者もいた。一方、生活に困窮し、その日暮らしを続ける者も少なくなかった。

そのような最中、1975 年 11 月にジャカルタで一人の残留日本兵がひっそりと亡くなった。友人が駆けつけてみると、すでに死後数日が経っていたという。

同志が誰にも看取られず亡くなった惨状に心を痛み、相互扶助組織結成の必要性を痛感した藤山秀雄氏が乙戸昇氏に相談。乙戸氏がインドネシア各地に散らばる残留日本兵に呼びかけ、1979 年 7 月 14 日、残留日本兵 107 名を発起人とする「ヤヤサン・ワルガ・プルサハバタン」（日本人・福祉友の会）

が設立された。

初代事務局長として会の運営を支えてきた乙戸氏は、手書きで1998年12月の200号まで続けてきた同会の月報（1996年5月号）で、残留日本兵の置かれた立場を時代別に分類し、以下のように位置付けている。

- 1940年代後半 インドネシア独立戦争時代
- 1950年代 インドネシア社会における生活模索時代
- 1960年代 身分の確定と生活基盤の確立時代
- 1970年代 躍進と初老期時代
- 1980年代 老年期と福祉友の会時代
- 1990年代 余生生活と福祉友の会の世代交替時代

福祉友の会は設立後、残留日本兵の親睦や相互扶助だけでなく、一時里帰り、軍人恩給一時金支給に向けた活動などを進めてきた。その活動のいかもあつてか、終戦直後は脱走兵とみなされた残留日本兵は1995年には69人が日本大使の表彰を受けたほか、一部は日本政府の叙勲を受章した。

■二世、三世に軸足移る

2000年以降、残留日本兵の数は目に見えて減り、福祉友の会の活動は、日系二世、三世たちにバトンが渡されることになった。

現在では、残留日本兵の存在を知った日本人が、南ジャカルタのカリバタ英雄墓地に眠る28人の残留日本兵を墓参る際には案内役を務めるなどの活動を続けている。独立戦争に参加した残留者たちに、1950年代、インドネシア政府からインドネシア独立殊勲勲章（ゲリラ勲章）が授与されたことから、インドネシアでは最高の榮譽とされる英雄墓地に埋葬されているものだ。日本の首相もジャカルタを訪問した際には、この英雄墓地を訪れることが多い。

ただ、独立戦争に身を投じた後も苦勞に苦勞を積み重ね、世界一とも言われる親日国であるインドネシアと日本の友好関係の礎の一端を担ってきた残留日本兵の存在が、時代を経るごとに忘れ去られていくことへの危惧は消えなかった。



カリバタ英雄墓地を訪問した日本インドネシア協会福田会長（右）と故・山本寛齋氏（左）

■両国関係の未来を見据えギャラリープロジェクトを立ち上げ

そのような中、残留日本兵の生きざまを記録に残し、少しでも多くの人に知ってもらうだけでなく、両国関係の未来を見据えた次世代の活動につなげようと、「インドネシア日本残留兵歴史ギャラリー」プロジェクトが立ち上がった。活動の担い手が、残留日本兵二世、三世、四世に移っていくことを意識し、未来志向で残留日本兵とその家族のこれまでの歴史を後世に伝え、次の世代の人たちによる日本インドネシア両国関係の深化を目指している。

同プロジェクトでは、現在休眠状態となっている南ジャカルタ・テベットの福祉友の会事務所を改装。1階は世代間交流の窓口機能を持たせ、2階は残留日本兵の歴史資料を紹介する展示フロア、また、最上階の3階は将来の両国親善を見据え、日系企業や個人が交流できるような支援拠点とする予定となっている。

残留日本兵の子孫や在留邦人、元駐在員ら有志によるプロジェクトチームは、「特に今インドネシア・日本両国関係に様々な面で関与している私たちにとって、残留日本兵とその家族・子弟のこれまでの歴史を後世に伝え、次の世代の人たちによる両国関係の構築に協力していくことは我々にとっての責務と考えている」との思いを持ち、2週間ごとに定期オンラインミーティングの場を持ち、展示資料や改装予算等、それぞれの担当ごとの進捗状況を共有。プロジェクトの実現に向けた募金活動も8月から開始し、2022年8月の改装完了、両国の国交樹立65周年となる23年7月のギャラリー正式オープンを目指し、活動を続けている。